
僕は僕だから僕なんだ

深雪林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は僕だから僕なんだ

【Nコード】

N3296Y

【作者名】

深雪林檎

【あらすじ】

ハーフで可愛らしい外見を持つ男の子と、転入生の美少女のお話です

分類は学園青春ドタバタラブコメディーってところでしょうか
一応Hなシーンも入る予定です。そこまで過激な描写を書くつもりありませんが？笑

作者の自己満足的かつ初めて執筆するので、温かく見てやって下さい

第1話 転入生

高2の春、始業式の翌日。

時刻は8時38分。

朝のホームルームギリギリの時間。

「やあ、ミリー」

自分の席に着くと左隣の席の無駄に爽やかな青年、神崎 心が声を
掛けてきた。

「おはようございます、心」

誰にでも敬語を話す、それが僕 雪村・A・ミリオネーゼの特
徴である。そしてハーフで髪はアッシュブロンド（学校では黒髪の
ウィッグ）である。

「相変わらずミリーは可愛いなあ」

「僕は男です。気持ち悪いので止めて下さい」

心は見た目は超が付くくらいの美形で長身、スタイルも良く運動神
経抜群なくせに性格が子供っぽい。普段からこんな調子なので僕は
呆れて返す。

僕は小柄だが運動もかなり出来るし、顔も…不本意ながら心と違う
方向で美形だ。

「はいみんな席に着いてー」

教室の扉を開けて担任の島田先生が入ってくる。

「HR始める前に転入生を紹介するわよー」

（転入生？始業式の次の日に？）

担任の発言に訝っていると、教室中がざわついているのに気が付いた。確かに普通に転入生が入ってくるだけでもそうなるだろう。ざわつく生徒を気にせず担任が転入生を教室に入るように促す。

「「「おおーっ！」「」」

「「「キヤーツ！」「」」

途端にざわつきが歓声に変わった。

僕は席が一番後ろで小さいから、転入生を見る前に前の奴が立ったので見えなかった。

「あ、なるほど」

思わず口にした。

背中まで伸びる綺麗な髪、細くて長い手足、少し凜とした整った顔立ち。

「へーあの娘も可愛いなあ。ミリと良い勝負だね」

左隣からなにやら聞こえたけど、無視しておこう。

「じゃあ自己紹介お願いねっ」

担任の進行でざわつきも収まる。

「柊 燈加ひいらぎです。よろしくお願ねがいします」

小さいが澄んだよく通る声で言った後、礼儀正しくお辞儀した。

途端にまた歓声とも絶叫とも言えそうな爆発音が教室に響く。

「はいはい、うるさいわよ。じゃあ柊さんあいてるところ適当に使
つてね」

手を叩き生徒を黙らせて、適当に席を決める。

まあ始業式に席替えを（勝手に）して、あいてるところは一番前の
3つしかないけど。

柊さんは何故か何かを探すように教室を見渡して、僕を見て止まっ
た。

「？」

僕が不思議がっていると、柊さんは僕に指を指して言った。

「あの男の子の隣がいいです」

「であるからこの数式を………」

前の黒板に書き込みながら数学教師が説明している。

一限目だというのに僕はすごく疲れている。

右隣には姿勢良く授業を聞いている柘さん、一番前には鈴木（だつたっけ？）君が。

柘さんの発言からの流れを簡単に説明。

柘さんが心に交渉

心が（駄々をこね）交渉失敗

反対側の鈴木（仮）に交渉

鈴木（仮）が断る

クラス中が鈴木（仮）に大ブーイング

鈴木（仮）が泣きながら一番前の席へ

鈴木（仮）君が可哀想だった。

後で謝っておこう。なんとなくそうしないといけない気がする。

それにしても何で僕の隣がいいなんて言い出したのだろう。

あの（席を奪った）後クラスみんなが質問責めにはしていたけど、それについては「特に意味はない」と答えていた。

「今日はここまで。ちゃんと予習復習しておくように」

考えているうちに授業が終わり、休み時間は相変わらず柊さんは質問責めで、一度も話すことなく午前中は終わった。

昼休み僕はいつものメンバーと屋上昼を取っていた。

「ミリーの隣の女、誰だよ？初めて見るけどよ」

購買のパンをかじりながら聞く間宮 凌^{まみやりょう}。金髪でピヤスを付けたこの辺一帯の不良のトップだが、実際は気さくな奴。ちなみに僕の前席だが午前中は爆睡（教師は黙認）のため全く知らない。

「転入生の柊 燈加さんですよ、凌さん」

答えたのは桐生 茅依^{かづゆい}ちゃん。僕よりもさらに小柄で髪の毛を左右の耳の上で縛っている、おとなしくて可愛らしい女の子。

「今更そんな質問なんて相変わらず抜けてるね、君は。」

笑顔でからかう稲嶺 来人^{いなみねくると}。人間観察と情報（弱み）収集が趣味な腹黒いメガネの男。本来、屋上の出入りは禁止だが、教頭に交渉（脅迫）して鍵を借りたらしい。

「凌ちゃんらしいけどね」

そして心に僕、それから

「玲はまだ帰ってきませんね」

伊波 玲はジャンケンで負けて飲み物を買ってきてもらっているのだ。

「私ちよつと見て来ます」

「あんなのほつとけつて」

茅依ちゃんを凌が止める。凌は玲が苦手なのだ。

「あんなので悪かったわね」

「げつ」

屋上の入り口に飲み物を抱えたショートヘアにリボンがトレードマークの玲がいた。それから…

「あつ、終つちじゃん。どしたの?」

「ここに雪村君がいるって聞いたから、伊波さんに連れてきてもらったのよ」

玲の後ろにいた柊さんが笑顔でまた僕を見て言うてくる。
また僕の名前を出すの？
綺麗な人からそう言われるのは嬉しいけど、なんで僕に？

「ミリーが？」

横で玲と言いつ争っていた凌が話に入ってくる。そして柊さんの言葉で来人の眼鏡が光ったのを僕は見た。

「はい、雪村君が」

「僕に何か用ですか？」

「いえ、特には」

「…えと、とりあえず一緒に昼でも如何ですか？」

「はい、頂きます」

笑顔で僕らの輪の中に入ってくる。
何だか頭が痛くなってきた。

第2話 嫌な予感（前書き）

後書きにプロフィールを簡単にまとめました。登場人物が増えてくるとまた書くと思います。

第2話 嫌な予感

結局、昼はいろいろ質問したりされたりして終わった。

隣の席にもかかわらず柊さんと初めて直接話したが、やっぱり綺麗な人だった。よく笑うし、みんなともすぐ打ち解けたようで玲や茅依ちゃんとなんかは、下の名前で呼ぶようになっていた。

その後は特に何かあるわけでもなく、柊さんは学校が終わるとすぐ帰って行った。

「さて、僕も帰りますか」

心はテニス部、玲はソフトボール部、茅依ちゃんは手芸部でそれぞれ忙しいし、来人は生徒会でいない、となると

「凌、起きて下さい。帰りましょう」

肩を揺すって起こす。

起こさなかつたら、多分ずっと寝ているだろうし、おそらくいつものメンバー以外で凌を起こせる程の勇気を持ち合わせている人は少ないだろう。

「ああ、ミリーか。もう放課後か？悪いけど今日は『店』に行くんだよ。一緒に来るか？」

大きく伸びをして、首を鳴らしながら聞いてくる。

その音に教室に残っていた生徒は過剰に反応して畏縮していた。やっぱり起こせないよな。

「今日は早く帰りたいので遠慮しておきます。みんなによろしく伝えてください」

「そうか。起こしてくれてサンキュな」

鞆を手に教室を出て行く。

タイミングの悪いことに、ちょうど教室に入ろうとした男子生徒が飛び退いて道を空ける。

「今日は一人で帰りますか」

僕も鞆を持って教室から出る。男子生徒はまだ床にひっくり返っていた。

凌の言う『店』というの要するに凌の仲間たちの溜まり場だ。ひよんなことから関わって凌と親しくなったが、まあ詳しい事はまた行く機会にでも。

僕の家は学校から電車と徒歩で30分くらいのところにある。道中、僕は柘さんのことを考えていた。

隣の席に来た事、特に用もないにも関わらず会いに来る事、始業式の翌日に転入してくる不自然な事。

まあ、それさえ気にしなれば他は全然普通というより、普通より全然綺麗な人だし笑顔が可愛いし、話しても楽しいけど。質問を聞いていて分かったことは

- ・親の仕事の都合で急に引越す事になったこと
- ・学校の近くに部屋を借りる事になったこと
- ・趣味は読書と料理、洗濯、掃除
- ・好きな食べ物、血液型、誕生日、好きな教科 e t c .

僕の事については何も答えなかった。考えているとすぐに家に着いた。

「ただいま帰りました」

中に入り、いるであろう父親言う。そして暑苦しいウィッグを外して髪を整える。相変わらず肩まで伸びる綺麗なアッシュブロンド。学校では隠しているが実は自分では気に入っている。

「やあ、ミー君おかえり」

リビングに入ると父親の庚紫こうむらが声を掛けてきた。純系日本人、黒髪、専業主夫。

「話があるけど良いかな？」

「何ですか？お父さん」

聞き返すと椅子に座るように促される。

「実はねミー君、明日から父さんはマリアさんの仕事の手伝いをしに行こうと思っているんだ。ほらマリアさんって仕事以外何も出来

ないでしょう？だから身の回りの世話とかそういう形で手伝ったり、たまには無理にでも休ませたりしないかね」

マリアというのは僕の母親で世界でもトップクラスのIT会社の社長で、ここ何年も帰ってない。だから今まで…というより交際当初かららしいが、家事は全て父親がやっている。

確かに僕の母親は仕事にかまけて他の事を何もしないから確かに行った方が良さのかもしれない。でもいきなり明日からって。

「僕はどうすればいいんですか？」

「ミー君が付いてきてくれるなら父さんも嬉しいけど、ミー君はこっちの暮らしの方が良いだろう？ミー君は日本に残って暮らしなさい」

「確かにそうですけど、いきなり1人暮らしはいくらなんでも…」

「一応家事全般は出来るが、さすがにきつい。」

「それについては問題無いよ。手は打ってあるから。もう5時半か。ちよつどいいかな？ついておいで」

「どついついことですか？」

「来れば分かるさ」

そうして車で連れてこられて、七階建てのマンションに着いた。

「どうだ？オートロック付き、3LDKだ。学校からも歩いて5分だぞ。今日からここに住むんだ」

「ですから、1人暮らしは…」

「話はここからだ。まあ入って」

三階の部屋に入る。ワンフロアに一部屋しかないらしい。

入ると何故かいい匂いがした。僕の好きなビーフシチューの匂いだ。部屋の中はもうすでにテレビやソファなどが用意してある。

「おお、良い匂いだね。ミー君、今日からはこの人と暮らすんだ。家事は全部やってくれる。仲良くやりなさい」

台所から『その人』を呼ぶ。
嫌な予感がした。

というより今したわけでもない。ある程度早い段階で予感はしていた。まず、親の仕事で引越す・引越し先は学校の近くという聞き覚えのある設定。昼に聞かれた好物の匂いがこの部屋にすること。不自然なタイミングで現れ、不自然に干渉する人物。

『その人』が台所から出てくる。

「よろしくね。雪村君」

嫌な予感というものは大概は的中する。『その人』はもちろん終
燈加だった。
頭がまた痛くなってきた。

第2話 嫌な予感（後書き）

登場人物のプロフィールを簡単に紹介します

雪村・A・ミリオネーゼ《ゆきむら》

- ・ 11月1日生 16歳
- ・ 身長 158cm
- ・ 体重 45kg
- ・ 趣味 散歩、料理
- ・ 苦手 特になし
- ・ 運動 A
- ・ 勉強 A
- ・ 特徴 敬語、可愛い容姿、アッシュブロンドの髪、ハーフ

神崎心 かみさきしん

- ・ 8月13日生 16歳
- ・ 身長 182cm
- ・ 体重 75kg
- ・ 趣味 スポーツ
- ・ 苦手 テスト
- ・ 運動 A+
- ・ 勉強 E
- ・ 特徴 イケメン、天真爛漫、テニス部

間宮凌 まみやしょう

- ・ 10月17日生 16歳
- ・ 身長 185cm
- ・ 体重 78kg
- ・ 趣味 ビリヤード
- ・ 苦手 伊波玲
- ・ 運動 S
- ・ 勉強 E-
- ・ 特徴 金髪、ピアス、不良

稲嶺 来人
いなみねくると

- ・ 9月25日生 16歳
- ・ 身長 170cm
- ・ 体重 58kg
- ・ 趣味 人間観察、情報(弱み)収集
- ・ 苦手 不明
- ・ 運動 B
- ・ 勉強 S
- ・ 特徴 眼鏡、生徒会、腹黒い

伊波 玲
いなみあきら

- ・ 3月5日生 16歳
- ・ 身長 162cm
- ・ 体重 47kg
- ・ 趣味 運動、天体観測
- ・ 苦手 虫

- ・運動 A
- ・勉強 C
- ・特徴 明朗活発、ソフトボール部、リボン

桐生 茅依 きりゆい

- ・1月30日生 16歳
- ・身長 152cm
- ・体重 40kg
- ・趣味 読書、料理、裁縫
- ・苦手 怖い人（凌はOK）
- ・運動 D
- ・勉強 A
- ・特徴 温和、ツースайдアップ

柊 燈加 あいらん

- ・4月30日生 16歳
- ・身長 170cm
- ・体重 55kg
- ・趣味 読書、料理、洗濯、掃除
- ・苦手 不明
- ・勉強 S
- ・運動 A
- ・特徴 背中まで伸びるストレートヘア、整った顔の美少女

- - - おまけ - - -

鈴木（仮）《すずきかつこかり》

- ・身長 172cm
- ・体重 60kg
- ・勉強 C
- ・運動 C
- ・苦手 柊燈加

島田 真美 しまだまみ

- ・身長 169cm
- ・体重 57kg
- ・担任 二年B組
- ・教科 国語
- ・彼氏いない歴 26年
- ・年齢 もちろん26歳

雪村 庚紫 ゆきむら ちかむら

- ・身長 175cm
- ・体重 62kg
- ・趣味 家事全般
- ・特徴 黒髪、専業主夫
- ・年齢 42歳

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3296y/>

僕は僕だから僕なんだ

2011年11月8日03時14分発行